

「電子政府」「電子区役所」への取り組みは、急速に進むIT革命に対応して避けて通ることはできません。電子自治体の設立は、さまざまな電子情報(文書)を作成することにつながります。近い将来に電子の記録も公文書館に移管され、大切な情報として保存していく必要を予想しなければなりません。電子の記録を紙の文書と同じルールで運用していくことは、実は公文書館にとって大きな課題となっています。

え？ 省スペース化、ペーパーレスによる環境保護、紙の資料より検索が簡単……………
等々、保存の面からも長所が多いという気がするけれど課題って何ですか???

電子記録の保存問題

ITといえば利便性、経済性、時間効率など明るい話題に集中しがちです。溢れる情報をじょうずに引き寄せ、整理し、即時性を持って利用可能にする。そのことによる管理コスト低減化の可能性を考えると活用しない訳にはいきません。しかし、電子記録の特性とリスクをしっかりと認識し事務改善を進めていかないと、文書の管理システムや公文書館の保存システムがうまく機能しなくなってしまう危険性があります。

電子記録の短所

機械可読記録であるため可視性がない

ハード・ソフトの技術が陳腐化しやすい
修復がしにくい

電子媒体の保存性・信頼性が低い

電子媒体の変換作業が必要

原本性が保証しにくい

機械がないと読めない

クリック一発の誤りで消えてしまう危険も

機械の進歩や変化が原因で記録が読めない

一か所の破損がデータ損失になりやすい

フロッピーディスクの寿命は20年?

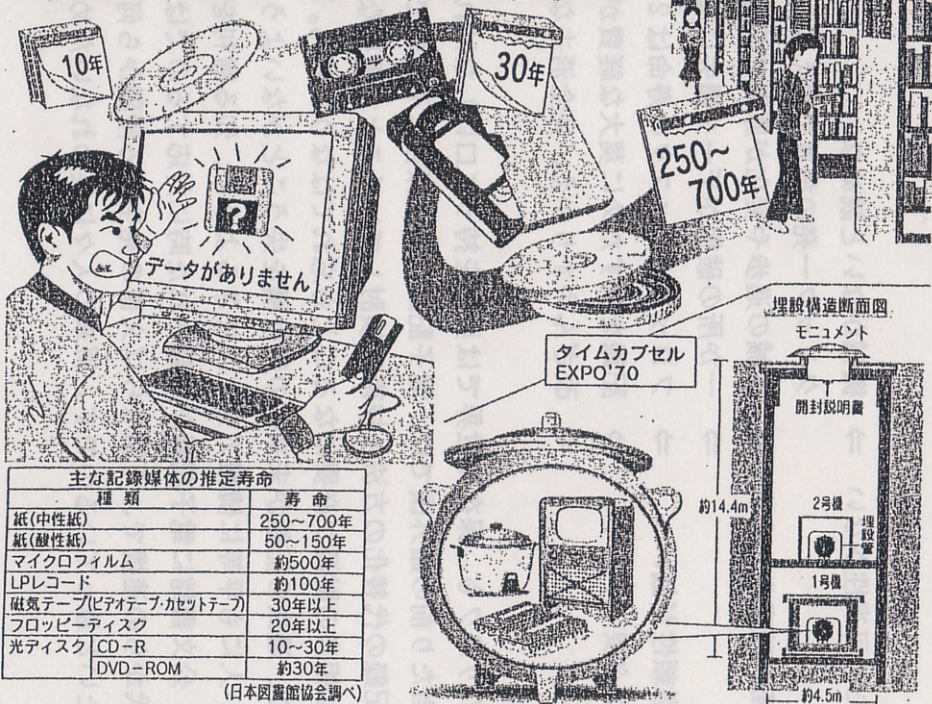
記録を残すために莫大な経費がかかる

改ざんやすりかえ、完全消去などが容易

優れた情報通信技術のリスクも、保存の世界では勇気を持って口にしなければなりません。公文書館の存在が当たり前の諸外国では、電子記録が長期保存に不向きであることを指摘し始めています。記録の代替化の方法と技術を検討していくことが重要な課題なのです。そして、代替化には相当の財源が必要になることも忘れてはなりません。

便利さを求めるあまり、過去の記録が未来への架け橋を失うことがないように、また、コンピュータを持たない人にも平等に情報アクセスできるように、知る権利を保障していかなければなりません。公文書館に電子記録が移管された時に対応するのでは遅いと思っています。現用文書時代からの連携で、可能ならば文書の発生する段階から何をどう保存すべきかを考えていきたいと思っています。将来の人々に笑われないために……。

未来に託す記録は万全か?



主な記録媒体の推定寿命

種類	寿命
紙(中性紙)	250~700年
紙(酸性紙)	50~150年
マイクロフィルム	約500年
LPレコード	約100年
磁気テープ(ビデオテープ、カセットテープ)	30年以上
フロッピーディスク	20年以上
光ディスク	10~30年
CD-R	約30年
DVD-ROM	約30年

(日本図書館協会調べ)

二十世紀もあと残りわずか。今世紀は後世からいなくなりに振り返れるのだろうか。現世の記録を残すには色々な手段がある。世紀変わり目に合わせ、百年後に再び開くタイムカプセルが大坂で眠りについた。一方、今世紀に生まれた膨大な情報が電子データの形で次世代に引き継がれていく。これらの記録は確実に残るのだろうか。

一九七〇年に大阪市で開かれた日本万国博覧会。これを記念して大坂公園の一角に埋設された二つのタイムカプセルのうち一つが三十年ぶりに掘り起こされ、内容の検査を経て再び埋め戻された。中身は当時最新のテレビや炊飯器、植物の種、冷凍乾燥した微生物など約二千点。保存が難しくとされる電子カビに注目が集まった。

常温でも発芽

「種の外観はきれいで、姿色もよかった」と語るのは、発芽実験を担当した大阪府立大学の渡瀬治郎教授。穀類や大根、葉橘、杉、ヒノキなど十七種類の種を試したところ、発芽率はハス一〇〇%、トウモロコシ九〇%、インディカ米八七%など、極めて良かった。常温保存でも発芽したのは遺伝子の状態が予想以上に良かったと示している」といふ。

掘り起こしたカプセルは百年ごとに開いた状況をチェックする。今回埋め戻す際には、微生物を対象に万博当時にはなかった「乾燥法」という新技術を使った。異状状態を利用して余分な水を吸取り除き、雑菌の繁殖による腐敗などを抑える。

デジタル情報も長期保存に限界

埋設した財団法人発酵研究所(大阪市の竹園町)所蔵の「タイムカプセル EXPO'70」は、二三十年は大丈夫。だが、一ト、樹脂が十二十年程度で劣化し、デジタル情報の記録部分が読取できなくなる。半永久的な長期保存を目指すには、半永久的にもついでに「

CD寿命20年説

「コンパクトディスク」の寿命は二十年しかない。今年度、一部の画紙などが読取を難し、波紋をかけた。音楽CDが一九八二年に商品化されたが、今年に十八年。記事はCDの表面を覆っているポリカーボネートの劣化が原因で、多くの複製機が欠かさない。多くの複製機が欠かさない。多くの複製機が欠かさない。多くの複製機が欠かさない。

大産業界が「かかりきり」していると報じた。レコード会社などは、実験データがほとんどなく、本物の寿命がどの程度かはっきりしない」と適切に懸念。ただ、専門家の間には「閉鎖の化学的特性を考慮し、寿命は五十年以下であるものが妥当」との見方が多く、日本図書館協会なども資料中で「一三〇年」という数字を使っている。情報化社会の進展とは裏腹に、今世紀に生まれた知的遺産が年月を経ると消えてしまいかねない。

維持管理適切に

映像や音楽、文学作品から遺伝子の解読結果まで、今世紀に世界が新たに生み出した膨大な情報は膨大な。タイムカプセルの中身が腐敗したとしても百年後の人々を少しがっかりさせるだけだろうが大切な記録が劣化して二十世紀の影が薄れてしまっている。これを防ぐには、定期的にバックアップを取るなど、適切な維持管理が欠かせない。多くの複製機が欠かさない。多くの複製機が欠かさない。多くの複製機が欠かさない。

残したい 20世紀の記録